

私たちの使命と人との繋がり

鶴見大学歯学部法医歯学准教授
歯科医師・博士（医学）

勝村 聖子

一、はじめに

私は本学歯学部に所属する歯科医師です。その私がなぜこのような場で、宗教家の皆様に並んで、命や心のお話をする機会をいただいたのか、まずは自己紹介を兼ねてそこからお話したいと思います。

実は歯科医師は歯の健康だけではなく、「身元確認」といわれる大きな使命を担っています。この仕事の重要性が知られるようになったのは日本航空墜落事故（一九八五）で、お顔では個人を特定できなくなってしまったご遺体に対して、銀歯や詰めものなど、お口の中の状態を確認し、歯科医院からのカルテと照らし合わせて本人であるかを判定する業務です。これは日本国内だけでなく、アメリカの同時多発テロやスマトラ沖地震などでも注目されました。タイでは身元が判明したご遺体のうち、55%がこの歯科所見により判明したとも報告されています。

そして七年前の東日本大震災の際には、この使命をもって、私は震災三日目には岩手県の遺体安置所で、ご遺体の検査を行いました。本日はその時の経験や感じたことについて、お話したいと思います。

二、突然の死を目の当たりに

縁起が悪いようですが、自分の最期を少し想像してみてください。百歳は目指したい、親の年齢は超えたい、癌家系だからそんなには長くないかもしれない、いろいろなことを考えるといます。そしてみなさんが共通して理想と

する死は、病院や自宅で、ベッドや布団の上で苦しまずに眠るようにその時を迎えたい、というものではないでしょうか。しかし残念なことに、ある日突然、理想とは懸け離れて何の前触れもなく、一瞬にして襲ってくる「死」が存在します。それが東日本大震災でした。約一万六千名の方が亡くなり、今なお二千五百名を超える方が行方不明のままとなっています。そしてそこには、大切な家族や友人、知人との別れを余儀なくされた多くの方々がいらつしやいます。

三、被災地へ

二〇一一年三月十一日、あの日のことは鮮明に記憶していることと思います。実は私は、あの地震を経験していません。あの日はなんと沖繩にいました。もちろん津波警報が沖繩まで発令されていたので、東北で大きな地震があったということは把握していました。しかしあの津波の規模については、ホテルに戻ってテレビで見て初めて知りました。夜遅くになってようやく上司とのメールがつながり、「犠牲者が多く出ている模様。被災地に向かうことになる。いつ帰ってくるのか」という短的な内容のメールが一層の緊張感を私に与えました。どうしよう、帰らなきやとホテルの部屋で呆然としたのを覚えています。そして翌日沖繩から戻り、停電になったままの大学で準備をし、神奈川県警の車で岩手県へと向かいました。閉鎖された東北道はガタガタで、通る車はすべて赤いライトを点灯した緊急車両、異様な光景でした。夜中の三時か四時ぐらいに盛岡の県警本部に到着し、説明を受けた後、そのまま沿岸部の遺体安置所に向かって作業開始となりました。

四、ご家族の思いと支援者の思い

震災後、家族と連絡がとれないと人は死を意識します。その一方で「生きていてほしい」という思いから、「連絡ができないだけ」「病院に収容されているのでは」と考えます。でもやはり「死」という現実に向かい合い、「早くみつ

けてあげなきゃ」「迎えに行かなきゃ」という思いから足を運ぶ場所、それが私たちが活動していた遺体安置所です。

遺体安置所には多くの方が集まっていました。入り口には、収容遺体に関する年齢、性別、特徴、所持品、着衣などの情報の一覧が貼り出され、心当たりがあると中へと進みます。

安置所に家族に該当するご遺体がないと、みなさん一瞬ほっとした表情をされますが、現実は一層厳しく、今度は別の遺体安置所へと向かいます。東日本大震災では、岩手・宮城・福島で合計百二十九箇所の遺体安置所が設置されました。津波で遠方まで流されてしまったご遺体も多く、隣の町やもつと遠くの遺体安置所まで、毎日通い続けた方も多くいらつしました。

残念ながらご遺体に対面することとなったご家族は、「悲しい・寂しい・かわいそう」という思いだったことでしょう。三月でしたので「寒かっただろう、冷たかっただろう」と、濡れた状態で発見された家族に毛布をかけてあげる光景も多く見られました。そして、こんな辛い思いをした家族をもうそつとしておいてあげてほしい、触れないで、と思われたと容易に想像できます。

私たち歯科医師はもちろん、その気持ちは十分理解しています。しかしその一方で、「きちんと身元を特定してあげたい」という思いがあります。私たちの遺体安置所での使命は、ご遺体を正しいご家族のもとに返してあげることです。感情や先入観があつて、記録を間違えてしまったら、違う人と間違える危険性があります。ミスがないよう正確に、詳しく、お口の中を検査したいと思うわけです。

当初の遺体安置所では、全身を検査するブースだば卓球台で仕切られていたものの、あとは床一面にご遺体が並べられていました。それだけ遺体の数が多かったということでもあります。私たちは並んだ遺体の間を歩き、遺体の横にしゃがんで口の中の検査を行いました。同じ場所では遺体とご家族が対面し、嗚咽が漏れている状況でした。いくら仕事とはいえ、その中でご遺体の口を開けて覗き込む行為に抵抗を感じました。

五、ご遺族、被災者と触れて

開けた同じ空間の中にいたため、ご遺族から話しかけられる機会も多くありました。一番多かったのは「最後は苦しんだと思いますか」という質問です。私はいつも「津波は一瞬のことだったと思います」と答えていました。水の中で苦しんで亡くなった方、冷たい中で凍えながら亡くなった方も多かったと思います。でもこの時はこの言葉しか、私の中では浮かんできませんでした。そしてご家族も、頭ではわかっていらつしやったと思います。それでも「それを聞いて安心しました（楽になりました）、ありがとうございます」と頭を下げてくださいました。こちらも頭を下げてしまう、そんなやりとりが何度もありました。

また、娘さんのご遺体を前にして、ある女性がおつしやった言葉があります。「娘は見つかったけど、孫がまだ見つからないのです。母親なのに子供から手を離すなんて」。産まれて数ヶ月のお孫さんだったそうです。娘さんとお孫さんの両方を亡くした悲しみや、お孫さんだけが見つからない不安や憤り、それがお嬢さんへのこんな言葉になったんだと思います。

お父様を探している二十代ぐらいの女性からは、「私の歯を見てください」と言われました。女性は下の前歯二本が癒合していて、「父も同じ歯をしています。知りませんか」とおつしやいました。「ここでは見ていません。でも特徴的だから、歯科医師が見ていれば記録に残しているはずですよ。とてもいい情報ですよ」とお話ししました。女性は「父と似ていると言われるのはとても嫌だったはずなのに、今はこの歯が手掛かりになればいいと思うなんて不思議ですね」とおつしやって、次の安置所へと向かいました。

また、五十代ぐらいの女性からは「見て欲しい」と携帯電話を差し出されました。「警察が娘で間違いないと言うけれど、良くわからない。これは本当に娘ですか」と問われました。携帯電話に映し出された若い女性を拝見して、「そうですね、娘さんだと思います」とお答えすると、「やっぱりそうですね。警察が嘘をつくはず不是吗？よね」とはおつしやいましたが、やはりまだ納得できない様子で、私以外のスタッフにも携帯を見せて、声をかけてい

ました。娘さんの死を認めたくないけど認めなくてはいけない。そんな葛藤が伝わってきました。

一方で、こんな親子のやり取りもありました。亡くなったおじいさんにちきんと毛布をかけてあげる中学生ぐらいの男の子がいました。一緒にいたお母さんにもっと丁寧にかけるよう注意をされ、「もう死んでるから、苦しいとかないじゃん」と反論しました。お母さんも「そうだね」なんていう会話をしながらも毛布を掛け直し、二人は帰っていききました。

納棺していたご遺族に声をかけられ、総入れ歯を戻したこともありました。「おばあちゃんの顔に戻ったね」というお孫さんに、おじいさん（ご遺体のご主人）が「入れ歯外したままだと怒っただろうね」と囁き、家族で笑いが起きていました。遺体安置所では、私たちのようなスタッフに声をかける人、同じ境遇にある人と話すことで共感する人。ご遺体を前に少し冗談を言って笑い合う家族もありました。亡くなった方との関係や年齢もあると思いますが、死への対応は様々なだと感じました。そして皆さんに共通して感じたのは、自分たちは生きていて前に進まなくてはいけない、という力強さです。

六、「ごめんね」から「良かったね」へ

最後に紹介するのは、女の子のご遺体とそのご家族の話です。安置所にきた家族がその子をみつけた瞬間、叫び声と泣き声が響きました。そしておじいさんが最初にかけた言葉が「良かったよね、ごめんね」でした。死なせてしまった罪悪感、そして何日もこの遺体安置所で一人で寝かされていたことへの謝罪でした。そして地震当日、津波が来ると知らずに送り出してしまった、その後悔もあつたそうです。そして一緒に犠牲となったお母さんも、同じ安置所の少し離れたところにいました。親子のご遺体と対面したご家族の様子は今も鮮明に覚えています。そして翌朝、私は親子二人が並んで安置されている姿を見ることになりました。二人が親子だと分かり隣に移動していたのです。遺体安置所ではご遺体には番号がつけられ順番に安置されているため、遺体の並べ替えは実は危険な行為です。しかしすべての関係者が、これは心温まる行為として受け止めていたと思います。

二枚の毛布を持って訪れたご家族も、二人が並んでいることに気づきました。そして「お母さんと一緒に寝かせてもらえてよかったね。もう淋しくないね、平気だね」と声をかけ、一枚の毛布を二人にかけて、帰られました。

七、学んだこと

東日本大震災は、未曾有・想定外という言葉が繰り返し使われました。そして被災地の現場では混乱が起きていたのも事実です。警察・医師・歯科医師・自衛隊そのほかすべての専門業種たちが、自らの使命は果たされたのか、反省を次にどう活かすべきなのか、現在検討が進んでいます。そして一方で、混乱があつたからこそ、私たちは思いがけない環境の中で働くことになりました。そして遺体を並べ替えるといった、柔軟な対応を見せてくれた関係者もいます。私は宗教家でもなく、精神や心理について勉強をした経験はありません。そして医師でもないのに、患者さんの死に直接触れることもありませんでした。そして今回、ご遺体だけでなく、ご遺族や被災者の方々と接したことで、歯科医師としての使命を再認識すると同時に、人の命と触れ合い、心というものを意識する機会をいただいたように思います。

そして、東日本を通して私がもう一つ学んだこと、それは東北の方々の振る舞いや姿勢です。海外のメディアを中心に日本人を賞賛する報道がありました。自らの家の片付けをしながらも、支援にきている警察車両・自衛隊車両が通るたびに深々と頭をさげる人々、遺体安置所でも私たちに「ありがとうございます、お世話かけます、ご苦労様です」と労いの言葉をかけてくださいました。

次の震災、それは私たちの番かもしれません。私たちは東北の方々のような精神性をもった行動ができるのでしょうか。そんな問いにも答えていかなくてもなりません。

最後になりますが、東日本大震災で犠牲になられた方のご冥福と被災された方々へのお見舞いを述べ、私の講演とさせていただきます。ご静聴ありがとうございます。